

プレスリリース

「SUSHI」展

2021年7月24日（土）-9月4日（土）

東京画廊+BTAP | 東京

〒104-0061 東京都中央区銀座 8-10-5 第4 秀和ビル 7階

TEL: 03-3571-1808 / FAX: 03-3571-7689

この度、東京画廊+BTAP ではグループ展『SUSHI— A World in a Grain of Sand』を開催いたします。日本、中国、香港、フィリピン、イランから計 11 組の作家の作品が一堂に集結する本展は、中国の若手キュレーター・ユニット集団 X[®] とのタイアップによって実現したものです。人々の眼差しを指先サイズの作品へと回帰させ、精巧につくられた小さいものへの礼讃を本展の趣旨としています。

展覧会タイトルの「SUSHI」は、鮓職人の小野二郎氏を追ったドキュメンタリー作品『二郎は鮓の夢を見る (Jiro Dreams of Sushi) 』からインスパイアされたものです。小野氏は、料理人であると同時に、定められた型枠の中で、手技の極みを追い求める芸術家でもあります。SUSHI ということばを題することで、「細微」「精巧」「日常」「手技」を緒に、異なるメディアの作品群を通して、「小中見大（小さいものを通して大きいものをみる）」といった真義の提示を試みます。

SHIMURAbros の〈Film Without Film〉は、ロシアの映像作家レフ・クレシヨフの「創造的地理」の 5 つ（約 8 秒）のシーンを選び、3D プリンターによって連続した映像を印刷した、“時間の彫刻”とも呼べる作品です。

中国気鋭の作家ニー・ヨウユ（倪有魚）が世界各国の硬貨を集めて制作した、一枚のネガフィルムほどの大きさの「コイン絵画」は、表のプレスされた凹凸模様がなだらかになるまで叩き伸ばし、その上から小さな絵画を描き足した作品です。制作過程の中で、硬貨は貨幣としての流通価値がかき消されると同時に、芸術的価値が新たに付与されています。フィリピン出身のグレゴリー・ハリリー（Gregory Halili）は、素材となる真珠母貝のポリッシングを自ら行い、海や空にみる自然モチーフの図柄を貝に施した作品を発表し続けています。先史時代に自然貨幣としても使われていた貝が、再びアーティストが加飾することによって、新しいマーケットの流通にのっていきその循環は、ニーの作品の同工異曲とも言えます。

中国の水墨画家のウー・チャン（呉強）は定規ほどの大きさの中で、宋元時代の山水画にみる「小中見大」の精神を継ぐ丘壑（山や谷の景）を描き、美術作家の入江早耶は無病息災を祈るかのように、古い薬袋の文字を消して、その消しゴムのカスで金剛力士像を作り、木彫作家の瀧本光國は、無数のノミ跡を残すことで、流動的な事物や姿かたちのない記憶を有形物に起こしています。中国の新

進作家ウィン・ヨンイェ（雲永業）は、イタリア製のミニチュア額縁と古典的な油性木版画を用いて、思わず覗いて観たくなるような、私的かつ怪しげな小さな絵画をつくりだし、観る者にささやかな揺さぶりをかけてきます。

香港人アーティストのジャン・シーリエ（張施烈）の作品は、一見なんの変哲もない木箱のようですが、じっと目を凝らして観れば、箱の中に描かれた絵から立ち上がる、意匠空間へと引き込まれていくことなのでしょう。特殊なメディウムを使っているため、異なる光とアングルによって、観え方や感じ方も変容していきます。

吹き抜けの天井やモザイクフロアといった精巧なつくりの美術館を、スパゲッティの空き箱内に構築する杉山健司の〈親密な美術館（Institute of Intimate Museums）〉シリーズでは、小さく複製された杉山の写真作品が展示されており、鑑賞者も一人しか収容することができません。壁や床などの内装も自身の気に入った色や模様が使われており、ディテールにこだわって作り込まれています。

政治家の肖像が使われている切手の政治的寓意を考察する、中国人アーティストのヤオ・ポン（姚朋）は、真贋の見分けがつかないほどの切手を手描きで創作することで、定型化された歴史に虚構の物語を吹き込んでいます。渡英イラン人作家のシャプール（Shahpour Pouyan）は、ソ連が開発した史上最大の核爆弾「ツァーリ・ボンバ」や長崎に投下された「ファットマン」といった、人類の文明史上にその悪名を轟かせた核爆弾をモチーフに、大小6つの異なるセラミックスカルプチャーを出品。シャプールは最もシンプルなビジュアル言語で、核開発がもたらした脅威をあらわにし、物音を立てることのない抽象的なスカルプチャーをもって、人類に深い打撃と悲しみをもたらした核爆弾の再解釈を試みています。また「ファットマン」は拡大鏡を使うことでしか視認できないほど小さく、観る者に往時を偲ばせ、深く考えさせます。

私たちはみな、相対の世界を生きています。空を舞う一粒のダストにせよ、広大無辺なコスモにせよ、それらすべてが相対的でありながら、相通じる共通性があることは言うまでもありません。小さな作品の数々を目の前にすれば、アーティストが有限なる型枠の内に、計り知れない事物と事象を凝縮していることを知るでしょう。それこそ「芥に須弥を納る世界」であり、このような日常の経験の外にある眼差しは、私たちに存在についての気づきを示唆してくれるのです。

ゲストキュレーター紹介

美術史研究を専門とするペニー・ダン・シュー（徐小丹）と美術作家のニー・ヨウユ（倪有魚）によって、2016年に結成された中国発のキュレーター・ユニット。これまで上海、香港、パリなどで5つの展覧会のキュレーションを手掛け、研究リサーチの成果をまとめた展覧会図録（記録集）を2冊発行している。未知数のXと、自然数全体の成す集合を表すNを冪(べき)の形で組み合わせたユニット名には、未知や無限という意味が込められており、美術史と制作という異なるふたつの視座からアプローチを図ることで、無限の可能性と新しい地平を切り拓こうと試みている。

ロンドンとブリュッセルに拠点を置き、現在、博士課程に在籍している美術史研究者のペニー・ダン・シュー（徐小丹）は、明清における摸倣画の研究を専門としており、過去にオックスフォード大学、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学(ミュンヘン大学)で開催された国際シンポジウムで学術研究成果を発表している。中国、ヨーロッパで活躍する著名なアーティストに取材を行い、寄稿文や美術批評を執筆する傍ら、国際的展覧会を手掛けている。各美術誌、ハンブルク美術館の刊行物などに寄稿しているほか、キュレーターとしてのキャリアは10年を超える。自身が翻訳した『ペギー・グッゲンハイム：とあるパトロネスの告白録（仮題/2014年）』は、中国において美学美術史専攻生の必読書となっている。

2014年にCCAA（中国現代美術賞）の最優秀若手芸術家賞に選出されたニー・ヨウユ（倪有魚）は、現在、上海とベルリンの2拠点で創作活動を行っている。ニーは2005年より、上海で現代美術の展覧会のキュレーションと美術批評の執筆を行うようになり、2007年から、作家としてのキャリアをスタートさせる。過去に、上海美術館、台北当代美術館、余德耀美術館（上海）、オレンジ・カウンティ美術館（カルフォルニア）、コンスタンツ美術協会（ドイツ）、ペロタンギャラリー、CAFギャラリー（ベルリン）、ナタリー・オバディア・ギャラリー（パリ）などで個展を開催。作品は、ブルックリン美術館、シンガポール美術館、M+（香港）、香港芸術館、上海外灘美術館、余德耀美術館、ホワイト・ラビット・ギャラリー（シドニー）、アラリオ・ミュージアム（ソウル）、meコレクター・ルーム・ベルリン、ウリ・シグ・コレクション、DSL、ギスラアートコレクション（スイス）などに所蔵されている。

東京画廊+BTAP プレス担当: 鈴木佳世

e-mail: info@tokyo-gallery.com / website: www.tokyo-gallery.com

開廊時間 | (火-土) 11:00-17:00

休廊日 | 日、月、祝

*現在オンラインによる事前予約制としております。

ホームページでご予約承ります。

東京画廊+BTAP | 東京

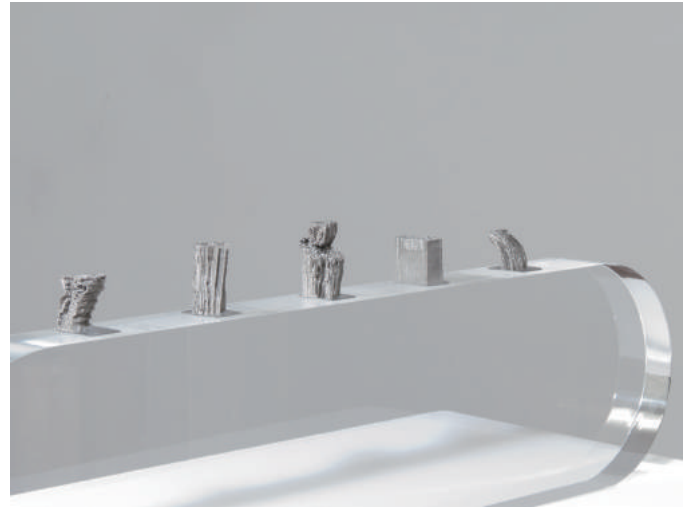
〒104-0061 東京都中央区銀座 8-10-5 第4 秀和ビル 7階

TEL: 03-3571-1808 / FAX: 03-3571-7689

www.tokyo-gallery.com



俣有魚 <中国册 (清風冷月)> (2013年)
コイン、特殊アクリル、20.5 x 31 cm (フレーム付)



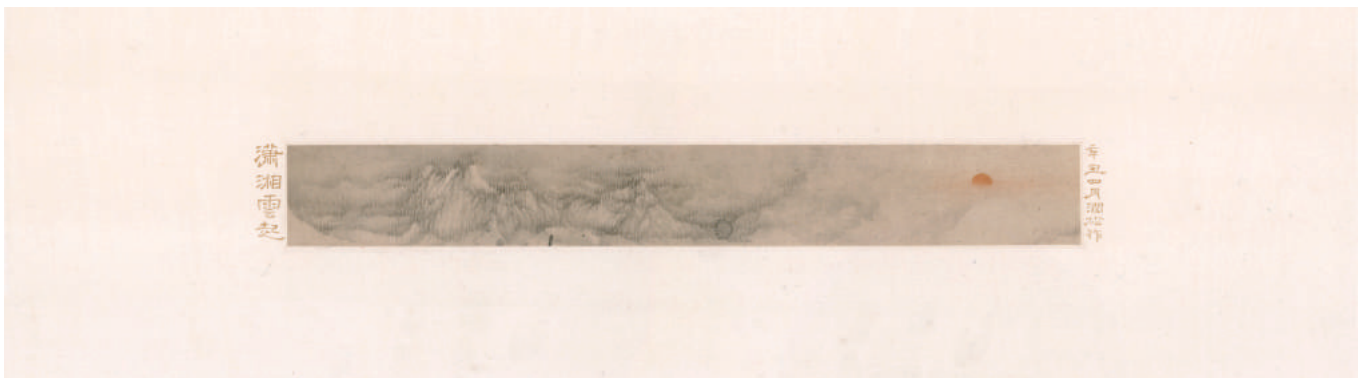
SHIMURAbros <映画なしの映画—創造的地理 (ed.5)> (2010年)
マレージング鋼、アクリル、Approx. 3.5 x 1.8 x 2.4 cm each (Set of 5)



入江早耶 <赤面金剛困籠奈 (牛頭天王)> (2021年)
葉箱、葉袋、消しゴムのカス、樹脂
Figure: 20 x 12 x 7.3 cm / Box: 20 x 24 x 12 cm



Gregory Halili <CruxIII> (2020-21年)
油彩、カピス貝、5.7 x 8.3 cm



吳強 <瀟湘雲起> (2021年) 絹本彩色、34.5 x 4.5 cm

